

学位論文題名

ロシア革命と東方辺境地域

—「帝国」秩序からの自立を求めて

学位論文内容の要旨

本論文は、「はじめに」及び三章からなる本文と「あとがき」をもって構成されている。

まず「はじめに」において、西山氏は本研究の基本的視点を明らかにする。氏によれば、ロシアは16世紀以来急速にヴォルガ川以東へ版図を拡大させるが、その過程でこれらの地方は「中央」に対する「辺境」、すなわちロシアにより文明化されるべき客体と認識されるようになった。本研究が対象とするヴォルガ・ウラル地域とセミレーチエ地域も、帝政ロシアによる植民が盛んに行われ、その帝国による支配は「文明化」の名の下に正当化された。これに対し氏は、これら植民地における「農民革命」の「自立性」、原住ムスリム諸民族と入植民らの運動の「併存性」に着目し、「中央」からの視点ではとらえきれない、地方における「未完に終わった植民地革命」の全体像を明らかにしようとする。

革命以前の状況を扱った第一章「帝国：抑圧と矛盾」は4節からなる。ここではまず多民族国家としての帝国の地域編成が示され、諸地域の帝国への併合政策が概観される(第一節)。ついで辺境、また植民地としてのヴォルガ中流・ウラル地域(第二節)とセミレーチエ地域(第三節)の状況が明らかにされる。第四節では日露戦争と革命運動の展開によって動揺した帝国秩序のストルィピンによる再編の試みと、その辺境地域への移民政策について検討される。

両地域における革命の進展を考察した第二章が本研究の中心である。まず第一節では、中央における革命の勃発と進展をうけて両植民地域で展開する革命が全体として検討される。「植民地革命」においては移民＝入植者は地方ソヴェト権力に結集し「革命」を推進するが、他方では非ロシア系諸民族の中にもさまざまな政党や政治グループが生まれ、さらにソヴェト権力のもとでムスリム共産主義者が独自の党を結成し、自立的な革命を目指したことが指摘される。

つづく第二、第三節では、セミレーチエでの革命が扱われる。第二節では、戦時体制下に出された対「異族人」徴用令に端を発する1916年のセミレーチエにおけるムスリム蜂起、及び蜂起勃発のさなかにトルケスタン総督に任命されたA.N.クロパトキンの新たな植民政策(懲罰的「隔離入植論」)について分析される。第三節では、このようにして始まったセミレーチエ革命の展開がたどられる。まず二月革命後、臨時政府はトルケスタン委員会を設置するが、委員会は旧来の懲罰的な植民政策を実質的に継続した。ついで十月革命をうけてセミレーチエでは、

コサックがムスリム住民と同盟して軍事独裁を樹立する。この軍事独裁政権は間もなく崩壊し、当地にもソヴェト権力が樹立されるが、それを支える基盤は何よりもまずロシア人入植民で、政党としてはポリシェヴィキと左派エス・エルであった。両派は当初農業政策や民族問題で対立しながらも、やがて合同により危機を回避しようとする。セミレーチエにおいてはいわば自発的に一党制が形成されるのである。こうして形成された植民地の共産党は植民主義的エートスに強く規定されており、原住ムスリムの社会・政治組織に対し禁圧的な体制であった。セミレーチエでは先の 16 年の蜂起で始まった原住ムスリム主体の革命の第一の波と、ロシア人を主体とする第二の波とが「併存・対抗」しつつ、「植民地革命」が展開したことが指摘される。

第四、第五節ではヴォルガ・ウラル地域における革命について論じられる。第四節では、18 年 3 月の「タタール・バシキール共和国」成立までの経過がたどられる。二月革命による帝政崩壊をうけて、この地域でも諸民族が自立を求めるにいたった。十月革命は事態をさらに進展させ、まずバシキール州評議会が自治政府樹立の構想を発表する。だがこの構想は地方ソヴェトの介入で挫折を余儀なくされ、自治実現の夢は絶たれることとなった。一方タタールも、この地域のムスリムの統合を目指し、独自の「ウラル・ヴォルガ国家」案を発表した。しかしここでもカザン・ソヴェトがこれに対抗し、「カザン労農（ソヴェト）共和国」を宣言するとともに、カザン市タタール人街に樹立された「ザブラーチエ共和国」を崩壊させた。一方中央の民族人民委員部もこの地域の民族の自立と統合の在り方について検討を進め、18 年 3 月「タタール・バシキール・ソヴェト共和国」の創設を布告した。これはタタール主導のムスリム民族運動とバシキールの分離自治運動に対抗するソヴェト政権の最初の具体的な案であった。この案はその後内戦のなかで放棄され、結局は個々の民族が個別の自治を獲得することになるが、その実態は、ロシア人を中心とするソヴェトが「民族自治」を主導するというものであった。かくしてその後「地方民族主義」と「大ロシア覇権主義」との対立が顕在化するが、党とソヴェトの「土着化」を進める政策はその解決策として出されたものであったことが指摘される。

第五節は、内戦期に一時白軍の側に立ったバシキール政府がやがてソヴェトの側に移り、その後「バシキール自治共和国」規定が成立し、ロシア連邦共和国内でその「自治」が確定する過程を検討する。バシキールヤの自立を目指す運動は、中央と地方、また諸政治勢力内の複雑な対抗・相関関係のなかで展開したが、結局失敗し、バシキールヤには一党制政治システムが樹立されたことが指摘される。

第三章は内戦を克服した革命政権が「ソヴェト同盟」を結成し、「辺境」諸地域を統合していく過程を検討する。第一、第二節ではヴォルガ・ウラル、及びセミレーチエ地域において一党制政治システムが確立し、両地域の統合がそれへの批判を排除しながらなされた経緯が示され、第三節では、中央アジア地域の統合過程が、ロシア人入植者主体の農民革命とその後のネップのもとでの土地改革の様相を描くことで示される。最終節において、ネップ期のソヴェト国家への統合を 20 年代の民族政策の展開を通して分析し、最後にスターリン体制への移行の筋道がたどられている。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 栗生澤 猛 夫  
副 査 教 授 赤 司 道 和  
副 査 教 授 原 暉 之  
副 査 教 授 松 里 公 孝

学 位 論 文 題 名

## ロシア革命と東方辺境地域

### — 「帝国」秩序からの自立を求めて

本論文は、ロシア帝国を解体に導いた 1917 年のロシア革命が、非ロシア系諸民族の居住する帝国の東方辺境地域にとっていかなる意味をもったかを考察したものである。従来、ロシア革命は非ロシア系諸民族にとっては「解放」を意味し（「諸民族の春」）、また地方での革命の展開は中央から指導され、規定されてきたと考えられる傾向にあったが、西山氏はこれにたいし、「地域」に「東方」、「辺境」という規定を付しつつ、「地域」から革命を開示し、従来のロシア革命像の転換をはかろうとする。

本論文は、具体的に検討すべき「地域」として、帝国ヨーロッパ部の東部辺境をなすヴォルガ中流・ウラル地域と中央アジアのセミレーチエ地域をとりあげ、両地域における帝国への併合、とりわけロシア人の移民・入植活動の状況、中央における革命の勃発と両地域における革命の「自立」的進行、さらに中央のソヴェト政府による「統合」の様相を明らかにし、新たなロシア革命研究の在り方を探ろうとする。

本論文はロシア革命を、国家でも民族でもなく、地域の視点から捉え直す試みである。ロシア革命を中心（ペトログラード、モスクワ）からではなく、ウクライナ、トランスコーカサス、ヴォルガ・ウラル地域のような辺境から捉え直さなければならないという問題提起そのものは、日本の史学史においても新しいものではない。しかしこうした辺境に関する従来の研究は個々の被抑圧民族に関心を集中する民族中心史観の枠を出ないもので、地域の民族関係の全体像が分析されることはなかった。ロシア帝国とその後継国家としてのソ連は、頂点に大ロシア人が位置し、底辺に被抑圧民族が置かれる円錐状のモデルで理解されてきた。これに対し西山氏においては、地域内の民族関係が自立的なダイナミズムをもつものとされ、帝国はそれらの地域の束として描かれている。このような帝国観を、社会主義体制崩壊後の旧ソ連諸国に蔓延する民族主義史学、原初主義史観と比べれば、その意義は一層鮮明である。

第一章のロシア帝国における諸民族に対する抑圧と併合の体制の考察は、その適確な問題点の提示という意味で秀逸である。第三章の、ソヴェト同盟形成期における民族地域の発展の多様な可能性の存在とその漸次的喪失過程に関する分析もよく整理されており、きわめて有益である。しかし独創性という点でもっとも優れているのは第二章である。

第二章では中央アジア・セミレーチエ地方と、ヴォルガ中流・ウラル地域の異質な二つの地域をとりあげ、そこにおける革命の展開を丹念にたどっている。セミレーチエにおいて革命はロシア人入植者、ムスリム原住民、種々の政治党派（ポリシェヴィキ、左派エス・エル、カデット等々）、ムスリム共産主義者、正教会聖職者、コサックなどさまざまな勢力が複雑に入り組みながら展開し、最終的に一党制政治システムが形成されていくが、本論文におけるその過程の分析はきわめて適確である。ヴォルガ・ウラル地方の政治史も、中央集権派、タタール民族主義、バシキール民族主義、そしてその他の小民族（チュヴァシ、マリ、ウドムルト、モルドヴァなど）の代表者という4者間の拮抗として描かれている。さらに、帝国の「東方辺境」において革命を生きた人物群像—クロバトキン総督からセチェーリニコフ、シュカプスキー、リュスクーロフ、スルタン＝ガリエフ、ヴァリードフ、サファーロフといった人々の思想と行動を具体的に描いたことも本研究の重要な貢献である。このように「地域」の視点の導入により、本研究はロシア革命の複雑な過程と実態を一層明確かつ具体的に開示したといえる。

もとより本論文に問題点がないわけではない。たとえば、「はじめに」において示される認識に含まれる曖昧性、また帝国を中央と地方という二項対立で捉えることの是非、異質な二つの地域を同じ枠組みで論じることの問題性、用いられる若干の用語（疎外、異化、スチヒーヤなど）の不明瞭性等、改善されるべき点は少なからずある。しかしそれらは本論文の主要な学術的貢献の価値を損なうものではない。

本委員会は西山克典氏により提出された博士申請論文を審査し、また口頭試問において問題点を質すなど、十分かつ慎重に審議を重ねた結果、以上に記したような本論文のもつ高い学術的価値に鑑み、全員一致で同氏を博士（文学）の学位を受けるにふさわしいものとの結論に達した。